

ヤブコウジ



ツグミ



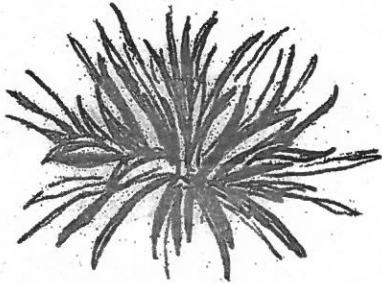
\*モズ

### ロゼット型

植物によっては、冬の間葉を伸ばすことをやめ、地面に張り付くように葉を放射線状に広げた姿になります。この姿をロゼット型と呼んでいます。



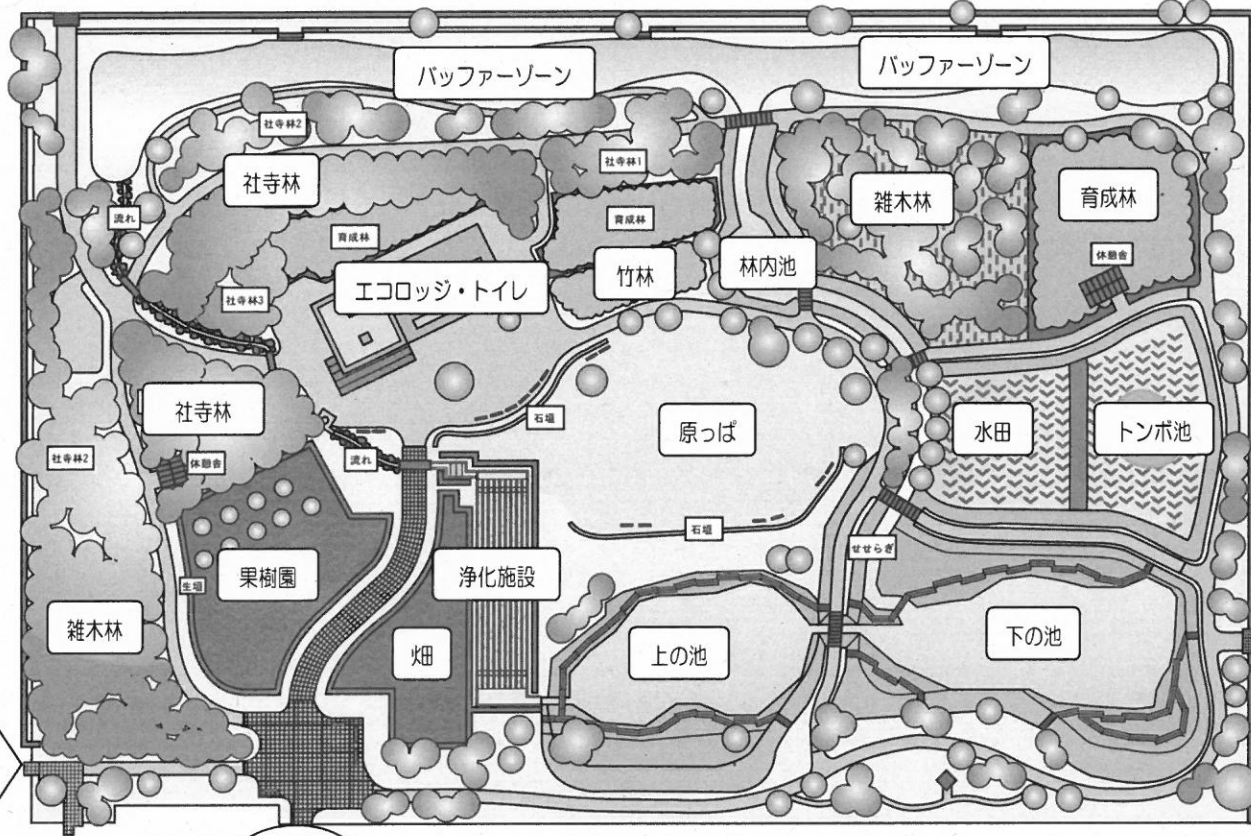
\*クチナシの実



\*ヒガンバナの葉



みの虫



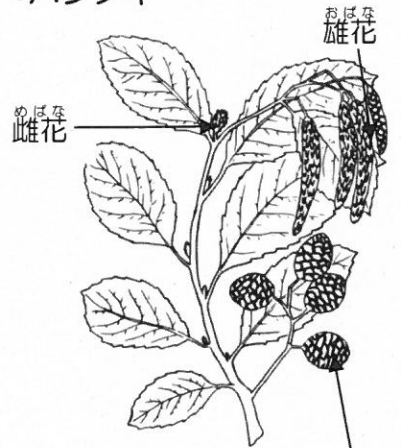
てんぼうし 展望室

\*印は、裏に説明があります。

読んで参考にしてみてください。



\*ハンノキ



\*ヒヨドリ

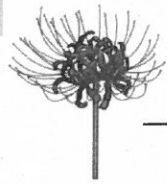
かまい 果穂

おぼな 雄花

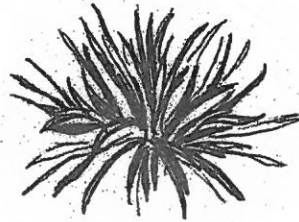
おぼな 雌花

# は ヒガンバナの葉

秋



冬

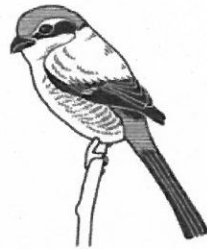


エコロジックへ行く道の両側で青々と茂っているのはヒガンバナの葉です。葉を見てこれがヒガンバナだと気づかない人も多いでしょう。

秋の彼岸ごろに花をつけますが、そのときは葉がありません。葉は花が枯れたあと土の中から葉がでてきます。

花が終わりの葉が枯れたヒガンバナは、冬の間に球根に栄養を蓄えます。春になるとヒガンバナの葉は枯れてしまします。

# モズ



モズはムクドリくらいのおおきさいで、さいたまけんでのうせんぶ農村部などでは普通に見られます。枝や杭などの見はり所にとまり、尾をゆっくり回しながら、昆虫や蛙などを捕獲します。ときに獲物を小枝などに刺す「はやにえ」を行います。生態園のカラタチの枝でも、冬の間、時折見られます。

いろいろな鳥の鳴き真似をすることから「百舌(もず)」の名前があります。

# ヒヨドリ



ヒヨドリは、「ピーヨ、ピーヨ」と甲高く鋭い声で一日中鳴き合っています。体は、スズメよりずっと大きく、灰褐色で、尾が長めのスマートな体つきです。寝ぐせがついたようなボサボサ頭も特徴ですが、何と言っても一番の特徴は、鳴き声です。かつては、夏は山地で冬は平地で過ごす漂鳥でしたが、近頃は一年中見かけるようになってきました。地上に降りることは少なく、羽ばたきと滑空を交互にくり返す波型の特徴ある飛び方で、木から木へと、鳴きながら飛んで行く姿を近くで見ることがあります。

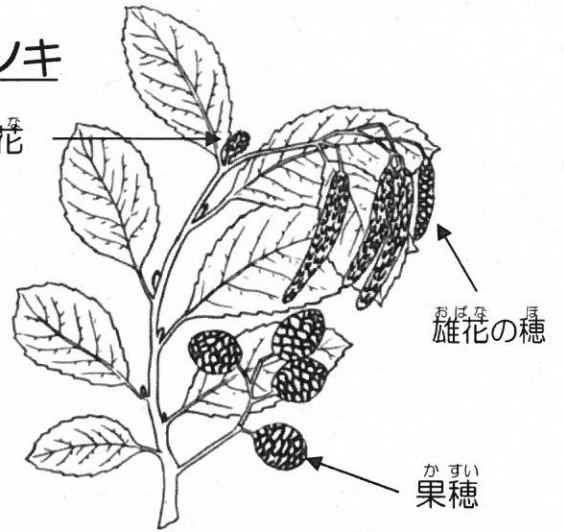
# み クチナシの実



おせち料理に欠かせない、葉きんとんを、きれいな黄色に仕上げるための染料として使われるのが、クチナシの実です。クチナシは、6月から7月頃に濃厚な香りを放つ白い花を付け、その後、少し変わった形の実を付けます。実は11月頃から12月にオレンジ色に熟しますが、熟しても裂けたりはしません。そこから、「口が裂けない」という意味で、クチナシという名が付けられたようです。

# ハンノキ

雌花



生態園には、ハンノキがたくさん植えられています。これは、埼玉県の蝶であるミドリシジミをよすためです。ミドリシジミの幼虫はハンノキの葉を食べて成長します。ハンノキは、水気の多い場所を好み、関東地方では田んぼの境を示す目印や収穫後のイネを干すはざ掛け用として植えられていました。水田や沼地が減り、ハンノキも減り、ミドリシジミの数も少なくなってきました。

ハンノキは、ちょうどこの寒い冬の間、花を咲かせます。だらりとさがった雄花の花粉が雌花に運ばれます。するとつぎとしあき、次の年の秋に小さい松ぼっくりのような実(果穂)ができ、種を落とします。



さいたいえん  
生態園マップ

\*\* 2017冬編 \*\*